

紹興市と言えば、紹興酒とこだまが返ってくるくらい有名な酒の産地である。

若いころは酒の苦手な私は、醸造酒と蒸留酒の区別もつかず、中国人でお酒の好きな人はみな紹興酒を飲んでいるくらいに思っていた。そして2007年に大連に赴任して白酒バイジュウという度数のとても強い酒を初めて見た。

辞書を引くと中国の醸造酒は“黄酒”と呼び、その代表格が紹興酒であることが書かれている。もう一つの対極にある酒が“白酒”と呼ばれる蒸留酒で、茅台酒や汾酒が有名と出ていた。大連勤務中は何かある毎に、白酒で乾杯、乾杯とやられたのには閉口したものだ。ここに挙げた三つのお酒は、中国八大名酒の一つだということも最近知った。

お酒の話はこのくらいにして、紹興市で書きたいのは人物である。この街は歴史上の人物を輩出している。また同市と深いつながりのある偉人も多い。なぜなのであろうか。前回の青島市では、康有為を青島とのゆかりのある人として描いたが、生まれやゆかりが青島市である歴史上の人物を私は殆ど知らない。私には紹興市が歴史的、地理的条件に恵まれたからだと思える。

紹興市の歴史は古く、紀元前490年頃街の体裁を整え、“越”の国の首都となった。春秋時代の呉の国との度重なる戦いは、「臥薪嘗胆がしんしょうたん」の故事を生み出すほどで、歴史ファンにとっては興味ある時代である。また中国六大古都のひとつである杭州市とは指呼の距離である。これから書こうとする“南宋”の首都であった。

東にすこし行った所にある寧波ニンポーは、古くから海外との経済・文化交流の窓口として重要な役割を果たした。遣隋使や遣唐使はこの港に着いたし、たとえば道元はこの港に上陸し、近くの名刹

天童寺で修行し帰国してからは永平寺を建立した。従って両市の中間に位置する紹興市は、自ずから偉人を生み出す豊かな土壌を形成していったからではないかと推察する。

さて誰から書こうかと迷うほどであるが、私の好きな愛国の詩人“陸游”（1125年～1210年）について話を進めていきたい。

彼は12世紀初頭にこの街で生を受けた。当時の紹興市は南宋の時代（1127年～1279年）で、女真族の金の台頭により開封を首都としていた北宋（960年～1126年）から南に追いやられ弱体化していた。生来愛国的で抗戦思想の持ち主だった彼は、南宋政府の軟弱外交に異を唱え金に対し徹底抗戦し、奪われた領地を奪回すべきと主張し続けた。これがため役人となってもいつも中央から遠ざけられていた。

この軟弱外交の中心人物が“秦檜しんかい”である。秦檜については、以前わんりい148号（2009年11月号）の「杭州見聞録」で書いた。かい摘んで説明すると、杭州市の西湖畔にある岳飛廟の境内に鉄製の像があり、観光客が蹴飛ばしたり、棒でたたいたりしていたその像の主が秦檜である。秦檜は、いまでいえば事なかれ主義の最たる男で、金に奪われた領地を奪回しようとした岳飛（1103年～1141年）を陰謀で捕えたうえ、毒殺した男なのだ。この男は陸游りくゆうに対しても陰険であった。

陸游は幼少のころから文才を認められ、29歳の時科挙の進士の試験で首席となった。ところが時の権力者の秦檜の孫が次席であったため、恨みを買って及第できないという事態となったのである。

陸游は政治には激しい主張を買いたが、私生活では清貧に甘んじ43歳の時に遺した「放翁家訓」（放翁は陸游の号）、で子孫に対し、欲望にとら

われず心の高潔を貫くよう「足るを知る」ことを強調し贅沢を戒めている。終生学問修養を積み重ね、一万首を超える詩を遺した南宋を代表する詩人である。ここで彼の人生のあるエピソードとそれに伴う詩を紹介したい。



陸游像

——陸游が31歳の時である。前年(1154年)に礼部試験を受けたが、あの秦檜に落第とされ仕方なく故郷の紹興にもどり、うつうつとした日々を送っていた時のことである。

ある春の日潘園(潘氏の庭園)の桃の花はちょうど満開であった。彼は誘われるように庭園に入り池のほとりで佇んでいた。そのとき向こうから若い夫婦が供をつれて彼の方に歩いてきた。なんと女性は唐琬とうえんという彼の元の妻であったのだ。11年ぶりに顔を合わせた二人は驚きのあまり声も出なかった。陸游は20歳の時に結婚したが、彼の母と、母の姪であった唐琬は折り合いが悪く、ほどなく離縁させられたのである。

二人は愛し合っていたが泣く泣く別れることになった。政治には厳しい主張をしても親には従わざるをえない時代であったのであろう。唐琬はすでに結婚し、その夫と連れ立って花見に来ていたのである。二人は言葉を交わすこともできずスレちがった。やがて彼女は夫にわけを話し供のものに酒と肴を持たせた。陸游はこの時の激情を詞に託し、庭園の壁に書き付けた。

詞の題は「釵頭鳳」(釵はかんざしの意)という。この題名は曲調の名で詞の内容とは関係はない。

(一)

紅酥手 黄滕酒  
滿城春色 宮牆柳  
東風惡 歡情薄  
一懷愁緒 幾年離索  
錯 錯 錯

つややかなその手からもたらされた黄滕の酒  
春の景色は城内に満ち、土垣に柳がゆれる日  
春の風はつらく、よろこびはあわい  
胸に溢れる愁い、幾年あなたと別れていたのか  
ああ過てり！ 過てり！ 過てり！

(二)

春如旧 人空瘦  
淚痕紅 絞綃透  
桃花落 閑池閣  
山盟雖在 錦書難託  
莫 莫 莫

春は昔のままだが、あなたは愁いに痩せていく  
涙の痕は紅にそまり、薄衣をしみとおす  
桃の花は散り行き、池の高殿はひっそりと  
堅い誓は今も残れど、恋の便りを交すよしなし  
ああ寂し！ 寂し！ 寂し！

この詞に対し、どのような形で後世に伝えられたのか分からないが、唐琬は自らも悲しみの歌を返している。片時の出会いの後、二人は二度とめぐり合うことがなかった。唐琬は失意の中でその後幾許もなくして没したという。薄幸の人であった。陸游の痛恨は生涯ぬぐい難く、たびたびこの地を訪れては追懐にふけている。潘園には二人が交わした詞碑が建立されている。まだ見たことがないので次回紹興に行く時には是非見てみたい。

この宋词をもっと味わいたい人のため、若干説明したい。まず(一)の中の「東風惡」は、自分たちを離縁させた母のことを言っている。「幾年離策」

は、何年も離れながら打開の方策を考える意である。一説によると離縁後しばらくは母に内緒で家を借り、時々逢瀬を重ねたがそれも母に見つかり逢うことも叶わなくなったという。「錯、錯、錯」は唐琬を守りきれなかった自分のふがいなさに、胸をかきむしられる思いであったのであろう。(二)の中では、まず“鮫”についてであるが中国ではサメの他に“ハンカチ”の意味があるそうだ。由来は南海の鮫人が織った絹のハンカチが出てくる物語が中国にはあり、転じてハンカチの意味にもなったそうだ。一度、何媛媛さんに教えていただきたい。「山盟」はことわざの「海誓山盟」のことで、海や山のように愛情が永遠にかわらないことをいう。

陸游について書けば紙幅がいくらあっても足りないので、次に“秋瑾”(1875年～1907年)を紹介したい。姓が秋で、名が瑾<sup>チュウ</sup><sup>ジン</sup>である。

秋瑾を知ったのは、2008年に杭州に旅した時である。岳飛廟からすこし行ったところに、剣を携えた等身大の真っ白な美しい像が立っていたのだ。友人に聞いて“秋瑾”という女性を初めて知った。帰国して調べると、日本とも関係があった清朝末期の女性革命家ということが分かった。中国の女性解放運動の先駆者であり、ある本には「中国のジャンヌダルク」と紹介されている。この紙面で彼女の生涯を詳細に描くことはできないので、いくつかのエピソードを織り交ぜながら書き進めていきたい。

まず美しい玉を意味する“瑾”であるが、祖父

がつけた名は“瑾”であった。瑾とは「むくげ」のことだが、生まれたとき庭には瑾の花が咲き乱れ、それにちなんでつけた名であった。彼女はこの花のように美しく成長していった。ところが世の中は親の期待したようにはいかぬもので、彼女は小さなころから男の子を集めては戦争ごっこをし、反骨精神は人一倍強く、成長してからは武術を習いたいと言いつつ出した。

今、放映中のNHKの大河ドラマの新島八重を彷彿とさせる。頭脳も明晰で四書五経の暗記も兄弟姉妹のなかですば抜けて早かった。花嫁修業をさせたい親は、「この子が男であったなら状元となったであろうに」と嘆いたようだ。このような秋瑾なので“瑾”という字が好きになれず、親を説得し同じ発音の“瑾”に変えさせている。

さて彼女を理解するため当時の中国を取り巻く情勢を見てみよう。清朝末期は、中国は西洋列強に侵略され、さらに東方の小国であり、朝貢国と見下していた日本に日清戦争(1895年)で敗れた。

祖国が滅亡の一途を辿っているのに清朝はなすすべもなく、自分たちの権利のことしか考えず反政府運動を弾圧するだけであった。周囲の男は強い者の顔色を伺うものばかりであった。一方で社会の風俗は「纏足」の奇習に縛られ、女性の人権は殆ど無視された。女性は正規の教育は殆ど受けられず、結婚も親の決めた相手でなければだめであり、妾になる女性も多かった。教育や結婚は日本も似たような状況であったが、閉塞感はいくら



杭州・西湖畔にある秋瑾像



日本留学中の秋瑾の写真



べくもなかった。

20歳の時、親の決めた意に添わぬ相手と結婚させられ二児をもうけた。夫は学問がきらいで目先の出世と遊びに明け暮れる毎日であった。何不自由のない生活であったが、国の前途を愁い、そして封建的な社会に我慢できなくなった彼女は夫に離縁を申し込む。それも許されなかった彼女は、日露戦争に突入したさなか幼子を残して、女子教育が進んでいるとされた日本に留学する道を選んだ。しかし、実情は中国と大差なく失望するが、日本は清朝打倒のための留学生を中心とした革命の拠点となっていたのである。ここで孫文や魯迅を知ることになり、水を得た魚のように革命のため身を投じていくのである。

ここでもう一つのエピソードを述べると

『秋瑾を乗せた船が神戸港に着岸したのは、1904年の6月末である。当初女性の地位のあまりの低さに反発して留学したが、留学生と接触する中でまず清朝を倒さねば何も変わらないと思ひ至り、反政府運動の中心として活躍するようになった。そうこうするうちに中国同盟会の発足など革命準備が進捗するにつれ、清朝は日本政府に対し清国留学生の取り締まりを要請した。

日本政府は大陸進出の思惑もあり、1905年11月に「清国留学生取締規則」を公布したのである。これに多くの留学生は反発し、留学生会館で集会を開いた。演壇に立った秋瑾は、「諸君、ここに至っては全員帰国し清朝を倒そうではないか。この中には日本留学を出世の早道と心得え、学を修めようとする輩がいる。もし仲間を裏切り清朝政府にしっぽを振るような者がいれば私のこの短

剣をくらわせる」と、懐から愛用の短剣を取り出し演壇に突き刺した。その気迫に会場は一瞬飲み込まれたようになり、次の瞬間拍手が一斉に沸き起こった。

というのである。この激しさはいったいどこから来るものであろうか。紹興人気質の一面を表しているのであろうか。

帰国した彼女は故郷の紹興中心に革命運動に奔走した。同志が設立した学校で若者に軍事訓練も施した。しかし、この学校で武装蜂起を計画したが、この計画が洩れ遂に逮捕されてしまう。そして日を置かず1907年7月15日、公衆の面前で斬首された。32年の短い生涯であった。その処刑場は市の中心地にあり、その場所に「秋瑾烈士記念碑」が立っている。遺体は西湖の西冷橋のそばに葬られた。その後この地にあった墓は移されて、その後に建てられたのが前述の剣を携えた白い立像で、「秋瑾嘯風」という本に出ていた。

裁判にもかけずに行われた秋瑾の処刑は、清当局が思いも及ばないほど中国全土に大きな反響を呼び、革命運動の精神的支柱となり、世の中を変えて行こうとする動きに激しさを加えて行ったようだ。彼女は「秋風秋雨、人を愁殺す」の有名な遺句を残したが、この句は多くの人に歌われたようだ。(武田泰淳は同名のタイトルの小説を書いている) なお密告した胡道南という男は同志に捕えられ惨殺された。孫文らによる辛亥革命が成就したのはその4年後であった。 (続く)

※秋瑾の写真2枚は共に、ウィキペディア・フリー百科事典より転載しました。